

Case.6

# 福島県福島市、伊達市、 桑折町、国見町、川俣町

中学生のアイデアを活用した広域連携の観光誘客推進

## 福島県北5市町（福島市、伊達市、桑折町、国見町、川俣町）の概要

福島県の県北地域は、福島盆地周辺に広がる地域で、その中心を阿武隈川が南北に流れ、豊かな自然の中に5市町が形成されている。

### ■ 福島市

飯坂・土湯・高湯温泉に代表されるいで湯の里であるとともに、四季折々にサクランボ、モモ、ナシ、ブドウ、リンゴ等の果物が採れる全国有数の果物の産地である。

### ■ 伊達市

伊達氏発祥の地であり、ゆかりの史跡が市内各所に残っている。古くは養蚕が盛んであり、現在は果物の一大産地である。あんぽ柿を干す光景が冬の風物詩となっている。

### ■ 桑折町

伊達氏発祥の地であり、宿場町、養蚕地帯として栄えた。旧伊達郡役所等の歴史的資源が数多く残されている。また、上質なモモの産地として有名な「献上桃の郷」でもある。

### ■ 国見町

古くから交通の要衝として栄え、旧奥州街道や旧羽州街道跡が今なお残されている。岩淵遺跡、塚野目古墳等の歴史の中で育まれた多彩なくらしの痕跡は、町の貴重な財産となっている。

### ■ 川俣町

約1300年前に崇峻天皇の妃「小皇子」によって伝えられた川俣シルクと、その絹織物で財をなした機屋の旦那衆が娯楽として楽しんだ闘鶏がルーツの川俣シャモが特産品である。

### ■ 福島県における位置



### ■ 主要データ

|                              | 福島市                   | 伊達市                   | 桑折町                  | 国見町                  | 川俣町                   |
|------------------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|
| 人 口<br>(平成27年国勢調査)           | 294,247人              | 62,400人               | 12,271人              | 9,512人               | 14,452人               |
| 面 積<br>(平成27年全国都道府県市区町村面積調)  | 767.72km <sup>2</sup> | 265.12km <sup>2</sup> | 42.97km <sup>2</sup> | 37.95km <sup>2</sup> | 127.70km <sup>2</sup> |
| 事業所数<br>(平成26年経済センサス-基礎調査)   | 13,420事業所             | 2,722事業所              | 549事業所               | 370事業所               | 710事業所                |
| 従業者数<br>(平成26年経済センサス-基礎調査)   | 148,723人              | 22,112人               | 5,530人               | 3,343人               | 6,284人                |
| 第1次産業                        | 413人                  | 200人                  | 18人                  | 23人                  | 26人                   |
| 第2次産業                        | 27,655人               | 7,574人                | 2,717人               | 994人                 | 2,888人                |
| 第3次産業                        | 120,655人              | 14,338人               | 2,795人               | 2,326人               | 3,370人                |
| 耕地面積<br>(平成27年農林水産関係市町村別統計)  | 7,160ha               | 4,250ha               | 1,040ha              | 1,130ha              | 1,240ha               |
| 観光入込客数<br>(平成27年福島県観光入込状況調査) | 6,411千人               | 648千人                 | 89千人                 | 72千人                 | 313千人                 |

# 中学生のアイデアを活用した広域連携の観光誘客推進

## 利活用事例の全体像 施策立案型

### 活用の背景

東日本大震災以降、風評被害に苦しむ観光や農業の活性化のため、福島県北5市町の連携による観光誘客の推進策を検討し、「①モニターツアーの実施」「②モニターツアー結果を反映したガイドブックの作成」「③プロモーション活動」の3つを柱として進めることとした。

同時期に、福島市立岳陽中学校イノベーション部がRESASを活用して考えた観光や農業の活性化に関する提案が、「地方創生☆政策アイデアコンテスト」で地方創生担当大臣賞を受賞し注目を浴びた。この中学生の提案内容が、市の課題認識や地場産業を活かした観光という方針と合致する部分が大いことから、中学生のアイデアを施策の一部に取り入れることを検討した。

### 中学生による分析・提案

分析 1 農業部門別販売金額の推移  
(産業構造マップ-農業の構造)

分析 4 観光協会へのヒアリング  
(独自分析)

分析 2 人口の変化  
(人口マップ-人口増減)

分析 5 福島市への来訪者  
(まちづくりマップ-From-to分析(滞在人口))

分析 3 農家・農協へのヒアリング  
(独自分析)

分析 6 身近な人たちへのアンケート  
(独自分析)

### 課題の見える化

- 福島市の農業の中心である果樹類は、「後継者不足」「価格下落」「消費低迷」等により、震災前から販売金額が減少している。
- 福島市内の飯坂温泉では、震災以降、観光目的の宿泊者が減少している。
- 福島市には近隣地域からの来訪者が多く、遠方からも来訪してもらうためには、まず地元の人たちが地元の魅力を認識し、他の地域の人たちへアピールしていく必要がある。

これらの課題を踏まえ、従来は観光地として認知されていなかった果物共選場を観光ルートに加えた旅行プランを考案し、観光と農業の活性化につなげることをコンテストで提案した。

分析 7 中学生のアイデアを取り入れたモニターツアーの結果  
(独自分析)

### 得られた示唆と課題解決のための施策案

中学生のアイデアを参考にツアーコースに追加した果物共選場がモニターツアー参加者から好評を得るなど、新たな地域の魅力発見につながった。

モニターツアー参加者のアンケート結果等を参考に、日本語版と英語版のガイドブックを作成した。また、これを活用して誘客のターゲットとしている仙台圏や首都圏でのプロモーション活動を実施した。

## 活用の背景

2011年に発生した東日本大震災以降、福島県内の自治体では、風評被害の影響等による観光客の減少や農業の衰退が課題となっている。このような状況を打開するため、福島県北5市町（福島市、伊達市、桑折町、国見町、川俣町）の首長が音頭を取り、広域連携による観光誘客推進を図ることとなった。その後、協議会を設立し検討を進めた結果、農業等の地場産業を活用した観光誘客を目指す方針のもと、「①モニターツアーの実施」「②モニターツアー結果を反映したガイドブックの作成」「③プロモーション活動」の3つを柱として観光誘客を推進することとした。

これらの福島県北5市町の取組とほぼ同時期に、福島市立岳陽中学校イノベーション部の生徒たちが、国主催の「地方創生☆政策アイデアコンテスト」において、RESASを活用した分析に基づく地方創生プランの提案を行い、地方創生担当大臣賞を受賞したことが話題となった。提案内容は、福島市の観光や農業に関する課題を明らかにした上で、観光と農業を結び付けた旅行プランを作成し、中学生自身が案内人として観光客を案内するというものであった。これらの中学生の課題認識や、農業等の地場産業を活かした観光というアイデアが、福島県北5市町の観光誘客方針と合致する部分が大きかったため、中学生のアイデアを施策の一部に取り入れ、誘客推進を図ることとした。



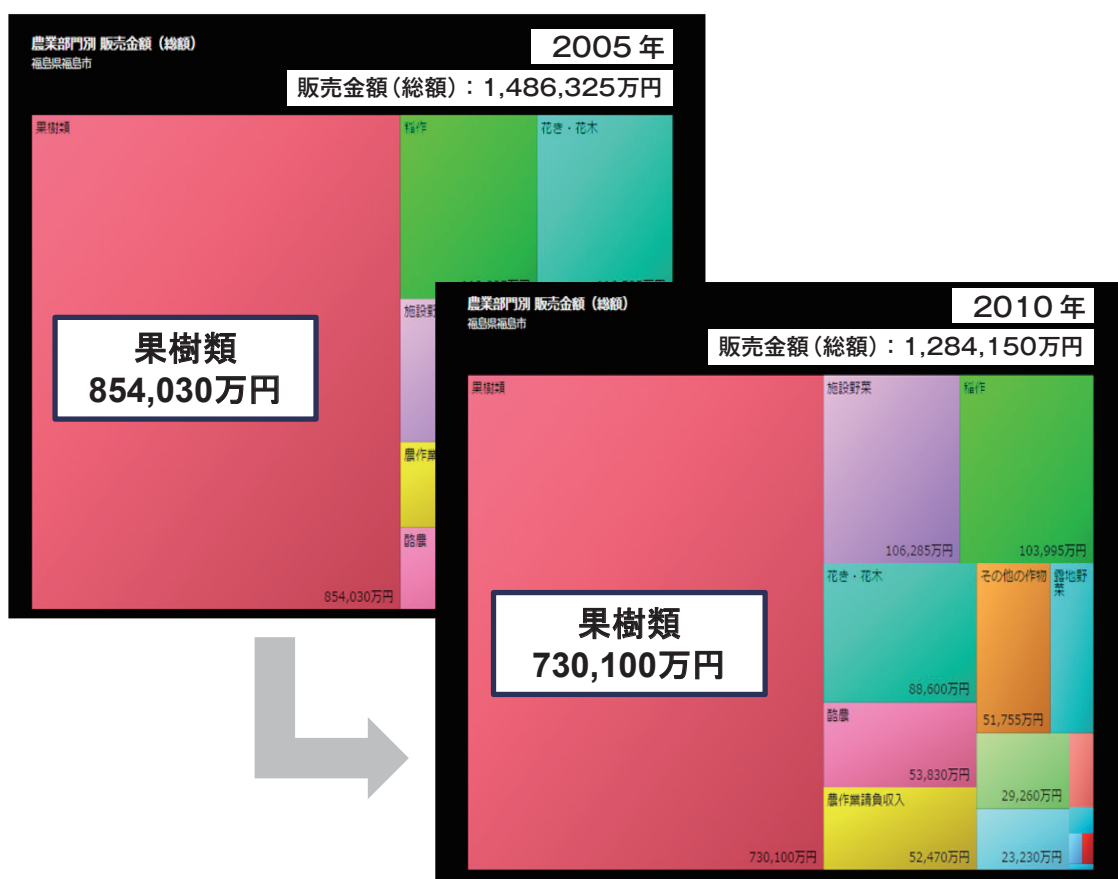
## 分析① 農業部門別販売金額の推移（産業構造マップ）

中学生は、東日本大震災の影響による観光客減少や農産物の売れ行き不振を課題と捉え、解決策を探るため、まず福島市の農業について分析した。

図1は、2005年と2010年における福島市の農業部門別販売金額を示したものである。これを見ると、販売金額の総額は、2005年は約149億円であるのに対し、2010年は約128億円となっており、5年間で約20億円も減少していることが分かる。また、主要品目である果樹類の販売金額をみても、2005年は約85億円であるのに対し、2010年には約73億円となっており、5年間で約12億円も減少していることが分かる。

中学生は当初、震災の影響により農産物が売れなくなったと考えていたが、以上の分析により、震災前から販売金額は減少しており、震災だけが原因ではないことが分かった。

（図1）産業構造マップ 農業の構造（福島県福島市）[2005年、2010年]



●産業構造マップ＞農業の構造＞「表示レベルを指定する」で「市区町村単位で表示する」を選択＞「表示年を指定する」で表示年を選択

**Point!**

震災前から農産物販売金額の減少は始まっていた

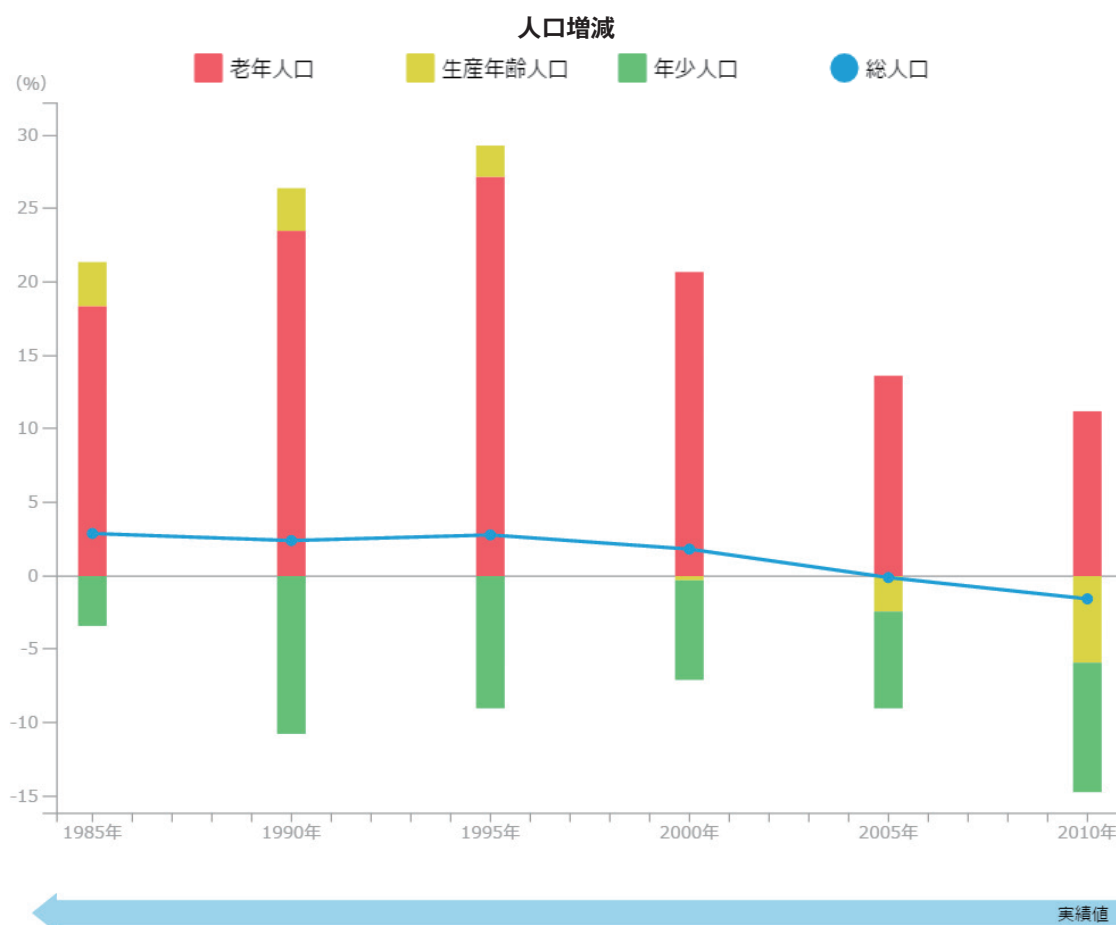
## 分析② 人口の変化（人口マップ）

震災前からの農産物販売金額の減少の要因を探るため、人口の変化について分析した。

図2は、福島市の人口増減の推移を示したものである。これをみると、2005年に総人口は減少に転じていることが分かる。また、年齢区分に着目すると、老年人口（65歳以上）は一貫して増加しているのに対し、年少人口（0歳～14歳）は一貫して減少が続いている。さらに、生産年齢人口（15歳～64歳）は2000年から減少に転じ、以降も減少幅が大きくなっている。

以上より、農産物販売金額が減少している要因は、高齢者の人口が増え、若年層の人口が減少することによって、農業の担い手となる人が減ってしまったからではないかとの仮説を立てた。

（図2）人口マップ 人口増減（福島県福島市）[1985年～2010年]



●人口マップ>人口増減>「表示レベルを指定する」で「市区町村単位で表示する」を選択>グラフを表示

### Point!

人口減少や高齢化に伴う担い手不足が農産物販売金額減少の要因と考えられる

### 分析③ 農家・農協へのヒアリング（独自分析）

分析②までの結果に基づく課題認識や仮説を検証するため、福島市内の農家や農協を訪問し、ヒアリングを行い、その結果を分析した。

図3は、そのヒアリング結果を示したものである。これをみると、農家、農協のいずれも農家経営者の高齢化や後継者となる若い人材の不足が課題と認識していることが分かる。また、果物の消費量が減少傾向にあることや、価格が低下傾向にあること等も課題となっていることが分かる。

以上より、人口減少や高齢化により農産物販売金額が減少したのではないかという仮説の立証に加え、新たな課題の認識にもつながった。

（図3）福島市内の農家・農協へのヒアリング結果 [2015年]

| 訪問先                     | 福島市の果物栽培の特徴                                                                                                                                                                  | 今後の課題                                                                                                                                                                                                                                |
|-------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 福島市の果物農家                | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 昔は養蚕が盛んだったが、外国の安い輸入品が主流となって儲からなくなったため、果物栽培中心に変わっていった。</li> <li>■ 福島市は扇状地で果物栽培に適している。</li> </ul>                                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 果物農家の高齢化により、だんだんと農家をやめる人が出てしまい、収穫量が減っている。</li> <li>▶ 東日本大震災後、やめる人がさらに増えてしまった。</li> <li>▶ 農家の後継者となるような若い人材がいない。</li> <li>▶ 外国産の安い果物が増えた上、果物の消費量も減少傾向にあることから価格が下がっており、農家の収入が減っている。</li> </ul> |
| JA新福島農業協同組合<br>福島市西部共選場 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 福島市は6月から12月まで果物が収穫されるが、これだけ長い期間、多くの果物を出荷できる地域は日本でも稀である。</li> <li>■ 職員による果物の形のチェックや光センサーによる糖度測定など、品質の良い果物を出荷するための努力をしている。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 農家の高齢化が進み、後継者も少ない。</li> <li>▶ 果物の消費量が減っており、今後どのように消費を拡大していくかが課題。</li> </ul>                                                                                                                 |

● 岳陽中学校「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015 応募資料」

**Point!**

ヒアリングにより、後継者不足のほか、消費低迷、価格下落等の課題を認識した

#### 分析④ 観光協会へのヒアリング（独自分析）

次に、観光面の課題を浮き彫りにするため、市内の主要観光地である飯坂温泉の観光協会へ訪問し、ヒアリングを実施した。

図4は、そのヒアリング結果を示したものである。これをみると、2010年は約81万人だった宿泊者数が、震災後の2011、2012年には約95万人に増えていることが分かる。しかし、避難者や自衛隊、警察官、除染作業員等の宿泊に多く利用されたことがその要因であり、観光目的の宿泊者は減少しているため、除染作業終了後の客数減少の懸念があることも分かる。

以上より、今後の課題として、観光目的の宿泊者を増やしていく必要があることが分かった。

（図4）福島市内の観光協会へのヒアリング結果 [2015年]

| 訪問先          | 宿泊者数の推移                                                                                    | 飯坂温泉の特徴                                                                                                                                                                                                | 今後の課題                                                                                                                                                                                                     |
|--------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 飯坂温泉<br>観光協会 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 2010年は約81万人だったが、2011、2012年は約95万人に増加した。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 東京から新幹線で2時間で来ることができ、アクセスが良い。</li> <li>■ いかにんじんやラジウム卵等の特色のある料理がある。</li> <li>■ 泉質が肌に良く、湯冷めしにくい。</li> <li>■ 震災後、避難者や自衛隊、警察官、除染作業員等の利用により、宿泊者数が増加している。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ <u>観光目的の宿泊客は減少している。</u></li> <li>▶ 震災前は中国や韓国等からのインバウンド需要も大きかったが、震災後は大幅に減少した。</li> <li>▶ 除染作業終了後の観光客呼び込みが課題。</li> <li>▶ 除染作業員の滞在向けに設備を変更した旅館の廃業が懸念される。</li> </ul> |

● 岳陽中学校「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015 応募資料」

#### Point!

観光については、観光目的の宿泊客の呼び込みが今後の課題である

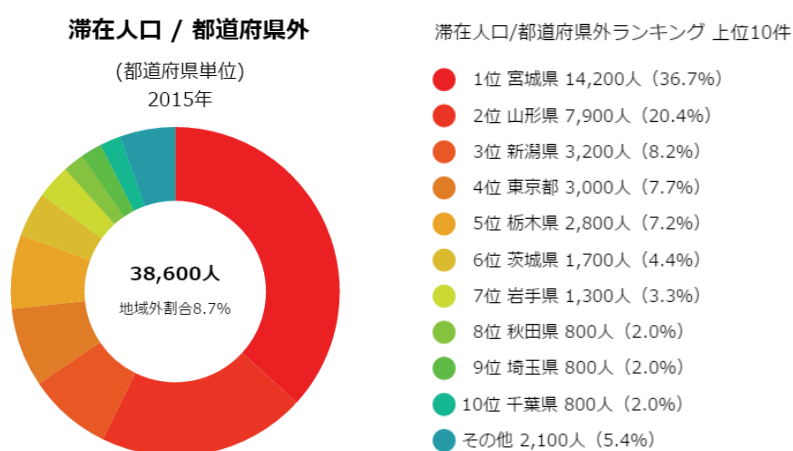
## 分析⑤ 福島市への来訪者（まちづくりマップ）

福島市に訪れる観光客を増やすためのアイデアの検討にあたり、福島市への来訪者について分析した。

図5は、休日に福島市を訪れる人がどの都道府県から来たのかをグラフで示したものである。これをみると、宮城県、山形県、新潟県等の福島県の近県からの来訪者が上位を占めていることが分かる。

以上より、福島市によく訪れている近県の観光客に魅力をアピールするとともに、遠方地域の人たちにも福島のことを知ってもらい、来訪につなげることが重要と考えた。

（図5）まちづくりマップ From-to分析（滞在人口）（福島県福島市、休日）[2015年]



●まちづくりマップ>From-to分析（滞在人口）>「表示する内容を指定する」で「休日の動向を表示する」を選択>グラフを表示

(注)2017年2月におけるRESAS第2次リリース前のマップであり、現時点の内容とは一致しない。

**Point!**

福島市への来訪者は、その大半が近県から訪れる人である

## 分析⑥ 身近な人たちへのアンケート（独自分析）

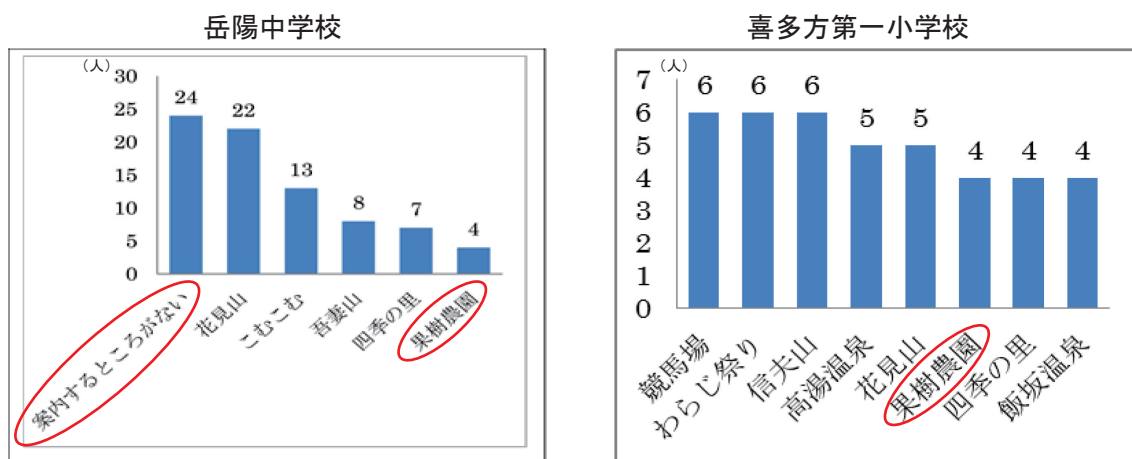
福島市を訪れる観光客が少ない理由として、福島市の観光地があまり知られていないのではないかと考え、アピールすべき観光地を明確化するため、岳陽中学校の生徒や喜多方第一小学校の児童と先生の協力を得てアンケートを実施し、その結果を分析した。

図6は、福島市の名所を尋ねたアンケートの結果を示したものである。これをみると、福島市は果物が名産であるのに、「果樹農園」等の農産物や果物に関するスポットの回答数はわずかとなっていることが分かる。

以上より、福島市は果物をはじめとした魅力の多いまちであるにもかかわらず地元の人たちもその魅力を十分に認識していないため、まず地元の人たちが福島市の魅力を知り、それを他の地域の人たちに伝えていくことが、観光客の増加につながるのではないかと考えた。

（図6）身近な人たちへのアンケート結果 [2015年]

Q.福島の名所は？



●岳陽中学校「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015 応募資料」

**Point!**

果樹農園等を名所に挙げる人が少なく、地元の人もその魅力に気づいていない

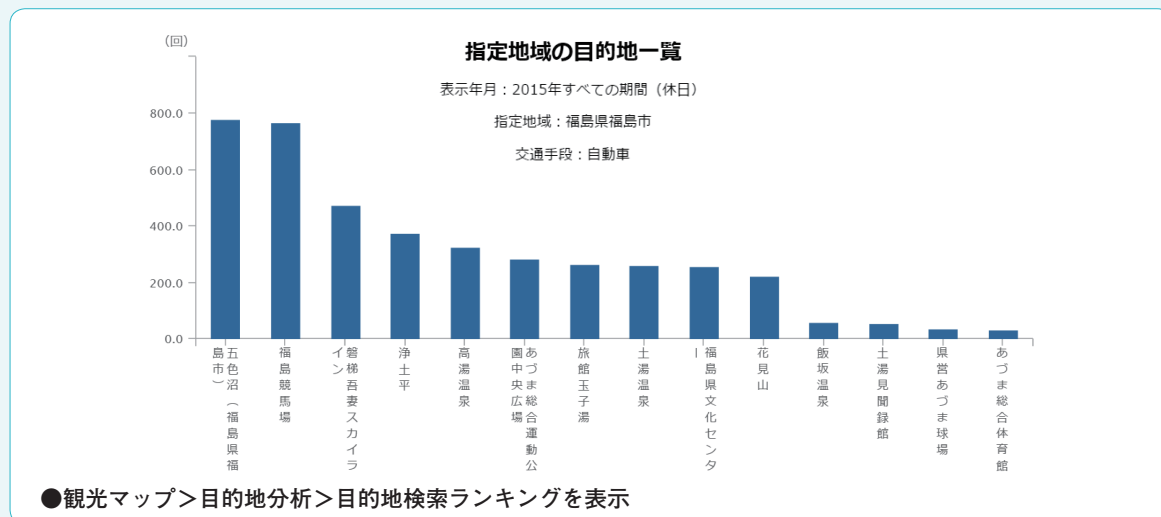
## 目的地分析・農業生産関連事業の実施状況

中学生はアンケートで果樹農園の魅力が十分に伝わっていないことを分析したが、RESASにより観光地の認知度や果樹農園の現状を分析することも可能である。

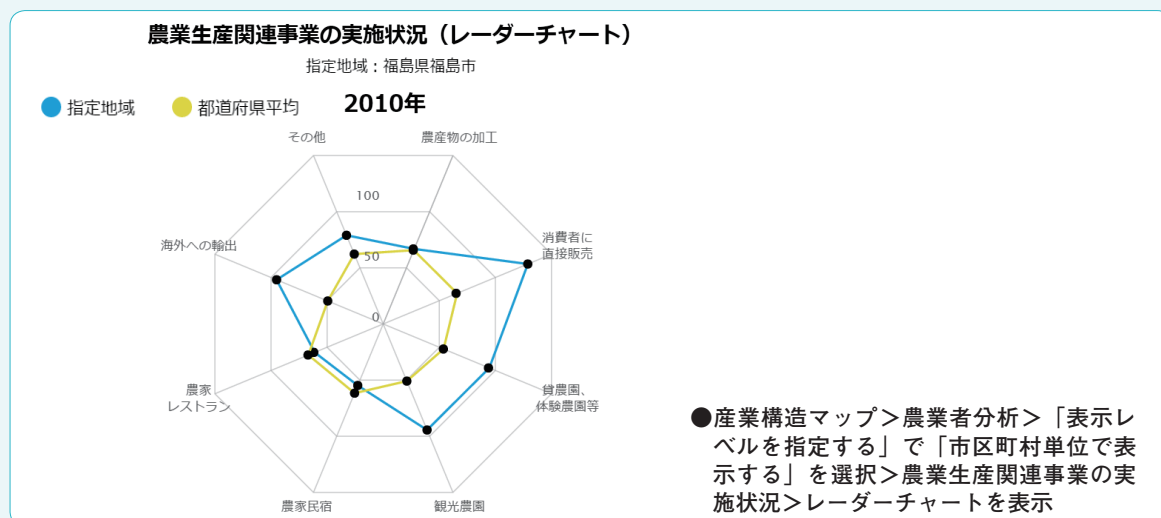
図7は、福島市内の主要スポットの目的地検索回数を示したものである。これを見ると、果樹農園に関するスポットは一つもないため、地元の人のみならず一般の観光客も、福島市内の果樹農園を観光地として認識していないと推察できる。また、図8は、福島市の農業生産関連事業の実施状況を偏差値化し、レーダーチャートにしたものである。これを見ると、「観光農園」「貸農園、体験農園等」の数値が大きく、市内で盛んなことが分かる。

以上より、果樹農園は福島市の強みであるが観光客に認知されていないと推察されることから、PR強化等が必要となることを、RESASの分析からも導くことができる。

(図7) 観光マップ 目的地分析（福島県福島市、休日、自動車）[2015年]



(図8) 産業構造マップ 農業者分析（福島県福島市）[2010年]





## 課題の見える化

岳陽中学校の生徒たちによる分析の結果、農業における課題として、人口減少や少子高齢化に伴う後継者不足、果物の消費量減少・価格下落等を認識した。

また、観光においては、観光目的の宿泊客減少や、近県からの来訪者がほとんどであることを課題として認識した。そして、これを解決するためには、まず地元の人たちが市の魅力を知り、それを他地域の人たちに伝えていくことが必要と考えた。

以上を踏まえ、中学生たちは「地方創生☆政策アイデアコンテスト」において、観光と農業を結び付け、中学生視点で「楽しい」「行ってみたい」と思う旅行プランを作成し、実際に中学生自らがガイド役を務めて観光客を案内する企画を提案した。この旅行プランの中で特徴的なのは、これまで観光スポットとしては認知されていなかった「果物共選場」をルートに組み込んだ点である。これは、単に福島市の魅力である果物に関連するスポットということだけではなく、高品質な果物を出荷するための光センサーによる糖度測定等の取組を観光客にみてもらうことにより、福島の商品への信頼を高めて消費量を増やし、ひいては観光客の中に農業をやってみたいと思う人が出てくることまで期待して考えたものである。これらの中学生独自の視点による提案が評価され、コンテストにおいて地方創生担当大臣賞の受賞につながった。

一方、広域連携による観光誘客推進に向けた検討を進めていた福島県北5市町の間でも中学生の受賞は話題となった。特に、観光や農業に関する課題認識や、観光と農業の連携による魅力発信といった方針は、福島県北5市町の認識とも合致する部分が大きかった。そのため、中学生のアイデアのうち「果物共選場」を観光ルートに組み込む案について、福島県北5市町の施策への反映を検討し、以降に実施するモニターツアーにおいて参加者の反応を分析することとした。



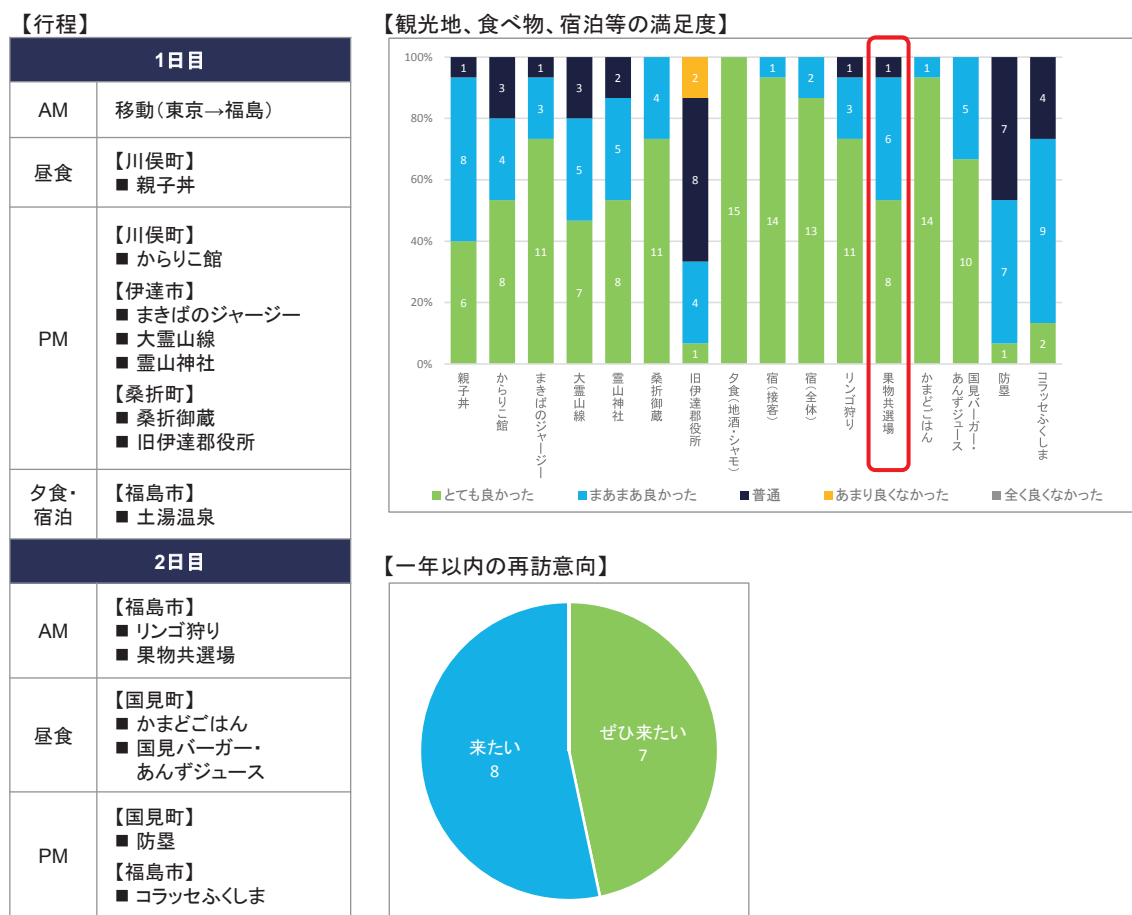
## 分析⑦ 中学生のアイデアを取り入れたモニターツアーの結果（独自分析）

ガイドブック作成やプロモーション活動においてPRする観光地を検討するため、福島県北5市町のおすすめスポットを結んだモデルコースを巡る1泊2日のモニターツアーを実施し、ここに果物共選場を加え、参加者の反応を分析した。

図9は、2016年10月26日・27日の二日間にわたり、首都圏在住の外国人15名（台湾8名、香港2名、タイ5名）を対象に実施したモニターツアーの行程と参加者アンケート結果の一部である。これをみると、中学生のアイデアを参考にしてコースに加えた果物共選場は、「とても良かった」と「まあまあ良かった」の合計が14名と多く、一年以内の再訪意向については、参加者全員が「ぜひ来たい」または「来たい」と回答していることが分かる。

以上より、果物共選場を観光地として紹介する中学生のアイデアの実現性を確認するとともに、福島県北5市町を結ぶツアーが観光客にとって魅力的なものであることが分かった。

（図9）モニターツアーの行程と参加者アンケート結果 [2016年]



●県北5市町誘客推進協議会「モニターツアー参加者アンケート結果（外国人）」を基に福島市作成

**Point!**

果物共選場が魅力的な観光地となり得ることが分かった

## 得られた示唆と課題解決のための施策案

従来は観光地として認識されていなかった果物共選場を地域の新たな観光スポットとしてPRするという岳陽中学校の生徒たちが考えたアイデアは、福島県北5市町が実施したモニターツアーの行程に組み込まれ、実施後のアンケートでは好評を得られた。

以上を踏まえ、福島県北5市町では、果物共選場を含むモニターツアーで好評を得たスポットを中心に、5市町それぞれの観光地をつなぐモデルコース等を掲載したガイドブック（日本語版と英語版の2種類）を作成した。また、作成したガイドブックを活用して、誘客のターゲットとしている仙台圏と首都圏において、観光誘客のプロモーション活動を実施した。

福島県北5市町では、当該地域における観光入込客数（延べ人数）を、2017年3月に768.2万人、2020年3月には801.0万人にすることを目標としており、引き続き観光誘客に向けた取組を加速させていきたいと考えている。

## 利活用の現場から ― 福島市 観光コンベンション推進室 ―

中学生によるRESASの分析に基づいたアイデアを活用するなど、特色ある観光施策を進める福島県北5市町。事業の経緯や今後の展望について、協議会の一員である福島市の担当部署にお話を伺った。

### きっかけは首長会での提案

福島市を含む県北5市町は地域的に深いつながりを有していることもあり、以前から定期的に首長が集まり、意見交換を実施していました。今回の広域連携による観光施策も、この意見交換の中から、「福島県北5市町の観光地をつなぐパンフレットを作成してみてもどうか」との提案があったことがきっかけでした。その後、実務者レベルでの協議を経て、誘客を推進するための協議会の設立や、モニターツアー、ガイドブック作成、プロモーション活動といった具体的なメニューが決まり、本格的に取り組を進めていくことになったのです。



■コンテストに挑戦した岳陽中の生徒

### 中学生ならではの斬新なアイデア

モニターツアー実施に向けて福島県北5市町がそれぞれ観光地を提案し、モデルコースの作成を検討していたちょうどその頃、岳陽中の生徒が「地方創生☆政策アイデアコンテスト」で受賞したことが話題となりました。正直なところ、それまでは地元の中学生在がそのような活動をしていることを知らなかったのですが、提案内容をみると、観光や農業における課題や、特色のある地場産業を観光の魅力として打ち出す方針等、協議会の認識と合致する部分も多くありました。さらに、従来は観光地として認識されていなかった果物共選場を旅行プランに組み込むなど、中学生視点の斬新なアイデアも豊富でした。RESASの活用により中学生でも本格的な分析ができることと、柔軟な発想に驚かされましたね。そこでぜひモニターツアーの行程に中学生のアイデアを取り入れてみようとなったのです。

### 「広域連携」と「ビッグデータの活用」

今後の行政運営で重要な要素の一つが「広域連携」だと考えています。特に観光分野では今回のように、通過型観光に悩む自治体と、飯坂温泉等の宿泊拠点を有する福島市のような自治体の連携により、win-winの関係を築けるのではないかと思います。もちろん広域となることで調整事項が増える大変さがありますが、今後も自治体間の協力で乗り切っていきたいと思っています。

もう一つは「ビッグデータの活用」です。まさにRESASがそうですね。今回、RESASを本格的に活用したのは中学生ですが、福島市も以前から、インバウンドの現状把握等に利用しています。我々だけでは得られない情報も多いので助かっていますね。また、広域連携に取り組んでみて分かったのですが、立場の異なる者同士の議論における最初の認識合わせとして、客観的な数値やデータは重要な役割を果たします。今後もRESASはもちろん、それ以外でも、ビッグデータを積極的に活用していきたいと考えています。



■果物共選場を見学するモニターツアー参加者

